

青年のきょうだい関係とアイデンティティの関連

——質問紙法、面接法を用いた検討——

柴 田 康 順

問題と目的

きょうだい関係に関する研究自体は多く行われているが、心理学領域で行われている研究はあまり見られない。特に本研究のようにアイデンティティとの関連からきょうだい関係を調べた研究は石原（1988）が親の養育態度との関連で述べているものが見られる程度で、ほとんど注目されていない領域ではないかと思われる。しかし、きょうだい関係は特に対人関係の面で大きな影響を及ぼす要因の1つであると思われる。

きょうだい関係に関する研究は社会的スキルの獲得との関連について述べられているものが多い（たとえば山口・田中，2008；相川，2010 など）。Freeman（1993）は、きょうだいを家族システム論的な枠組みから捉え、きょうだい関係は家族関係の文脈の中で独自の役割を担う重要な下位システムであるとしている。きょうだい関係の主な役割は、個人が家族外における社会的ネットワークの一員となるための練習の場、導入の場を与えることである。依田（1990）によると、特に幼少期のきょうだい関係は年齢差があることから親子関係と類似したタテの関係であると同時に、同じ子どもという点で友人関係と類似したヨコの関係も併せ持ったナナメの関係とされ、親子関係と友人関係の橋渡しの役割を果たしているとされている。また、友人関係とは異なり、共に生活していることから相互交渉の頻度も高く、感情が抑制されない場面も多いため、独特な社会的スキルを学習する場となるとも言われている（繁多・青柳・田島ら，1991）。一方で、山口ら（2008）のようにきょうだいの存在が一概に社会的スキルの獲得を促進させるとは言えないとし、

社会的スキルの内容自体に着目する必要性を指摘する研究も見られる。

きょうだい関係の質について言及した研究として代表的なものとして依田（1990）の研究が挙げられる。依田（1990）は幼少期のきょうだいを対象とした研究で、「調和・対立・専制・分離」という4つのきょうだい関係の分類を見出している。調和関係とは、きょうだい二人の仲の良い関係で、二人の間に親和的な雰囲気が認められるものである。対立関係は、きょうだい二人の中で、一人が優位に立っているのではなく、対等の立場で相互に対立し、張り合っている関係である。専制関係とは、きょうだい二人の中で、ひとりが優位に立っている関係である。分離関係とは、きょうだい相互の間に積極的な交渉が認められない関係である。ただし、きょうだいが常にいずれかのタイプに固定的に分類されることなどありうるのだろうかという点で、この分類には疑問を持たざるを得ない。また、依田（1990）の研究は幼少期のきょうだい関係を対象としたものであるが、青年期のきょうだい関係はより複雑な関係性に色づけられていることは想像に難くない。藤田（1998）は大学生を対象として小学生時代と大学生時代のきょうだい関係を比較し、小学生時代は「対立型」「対立専制型」が多く、大学生時代は「調和型」「対立専制型」が多くなるというきょうだい関係の質的な変化について言及する中で、きょうだい関係については個人差が無視できず、個人差についての検討も必要であるとして統計的実証研究によるアプローチの限界について指摘している。また、磯崎（2004）はきょうだいのいる大学生に対して質問紙調査を行い、きょうだいがある程度の年齢になるとそれぞれの生活パターンや関与の度合いが変化したり、お互いに相手のことを多様な視点から捉えることができるようになったりすることで、きょうだい間の葛藤や軋轢が低下し安定した関係になっていくのではないかと推察している。

きょうだいに関する研究は親子関係や夫婦関係と比べて実証的な研究が少なく、この理由として白佐（2004）は①きょうだい関係の軽視、②研究の困難さ、③間接的な影響の多さ、の3点を挙げている。実証的な研究が少ないきょうだい関係について研究するための方法論として、質問紙による量的な研究が多く行われていることには意義があると思われる。しかし、間接的な影響が多いきょうだい関係に関する研究だからこそ、個別性を重視した質

的研究によって検討されることが求められると思われる。ただ、きょうだい関係について質的研究法によって考察した研究は磯崎（2004）が自由記述形式で行ったものを除いてほとんど見られないのが現状である。したがって、きょうだい関係と現在の自分との関連について考察するために面接調査を行うことには意義があると思われる。

以上のことから本研究では、青年のこれまでのきょうだい関係と現在の青年のアイデンティティとの関連について、質問紙法、面接法を併用して把握することを目的とする。

調査方法

調査の手続き 都内近郊在住の青年に対して調査依頼を行い、調査目的に關して合意の得られた 10 名に対して、2011 年 2 月から 5 月にかけて調査を行った。調査協力者の平均年齢は 22.2 歳（SD=2.39）であり、男性 5 名、女性 5 名であった。調査協力者の性別および調査当時の所属と年齢について表 1 に示す。

表 1 調査協力者の属性（調査当時）

	性別	年齢	所属	家族構成
A	男	23	国立 A 大学大学院	父、母、弟
B	女	25	金融系企業	父、母、弟
C	男	21	私立 B 大学	父、母、弟、弟
D	女	19	私立 C 女子大学	父方祖母、母方祖母、父、母、兄
E	男	20	私立 B 大学	父、母、姉、弟
F	男	25	心理系専門職	父、母、妹
G	女	25	法律系専門職	父、母、姉（隣家に祖母）
H	女	19	国立 A 大学	父、母、妹、妹、弟
I	女	23	建築系企業	父、母、姉、姉、姉
J	男	22	教育系企業	父、母、弟

表2 面接質問項目

- ・きょうだいとの関係について
- ・両親を含めたきょうだいとの関係について
- ・きょうだいの中の自分について
- ・きょうだいから受けた影響について

調査内容

(1) 半構造化面接

調査協力者に対して、表2のような質問項目について半構造化面接を行った。また、面接法による調査結果を分析するにあたって、データの客観性を重視するために語りを文脈から切り離した状態で分析するという社会構築主義的な分析方法は用いず、語りに解釈を加えて内容を読み取っていく内容分析を行う。分析の単位はエピソード単位であり、各々の文量は1行を40字とすると5～10行程度であった。エピソードを分析単位とすることで、調査協力者の語りをエピソードごとの反応様式の差異として捉えることができると思われる。

(2) 質問紙調査

調査協力者の調査時のアイデンティティの状態を量的に測定するための目安として、Marcia (1980) のアイデンティティ・ステータス理論を参照して作成された同一性地位判別尺度(加藤, 1983)を実施した。この尺度は『現在の自己投入』、『過去の危機』、『将来の自己投入の希求』(各4項目、6件法)という3つの変数から成り立っており、各変数の得点を分類チャートに従って分類することで、アイデンティティ・ステータスを評定するというものである(図1)。加藤(1983)はMarcia(1980)の分類をもとに、i) 同一性達成地位、ii) 権威受容地位、iii) 積極的モラトリウム地位、iv) 同一性拡散地位の4分類に加え、v) 同一性達成一権威受容中間地位(以下AF中間地位)、vi) 同一性拡散一積極的モラトリウム中間地位(以下DM中間地位)の2分類を設定している。

倫理的配慮 調査に際してICレコーダおよび筆記により調査内容を記録すること、語りの内容について公表する際には協力者が特定されることのない

ように配慮すること、また回答の拒否や途中での終了により調査協力者は何ら不利益を被らないことなどを調査依頼時および同意書への署名を求める際に書面と口頭で説明した。

結果と考察

1. 質問紙調査の結果と考察

アイデンティティ・ステータスの分類チャートを元に調査対象者を分類したところ、AF 中間地位が4名、DM 中間地位が6名となった(表3)。AF 中間地位とDM 中間地位の間で下位尺度の平均値を比較したところ、『現在の自己投入』($t(7) = 5.97, p < .05$) および『将来の自己投入の希求』($t(8) = 2.49, p < .05$) 得点においてAF 中間地位がDM 中間地位と比べて有意に平均値が高かった(表4)

2. 面接調査の結果と考察

きょうだいとの関係についての面接ではあったが、自分がきょうだいの中、家族の中でどのような役割を担うのかといったことについては両親の影響が大きいようである。また、きょうだいと両親の関係やきょうだいが両親から受けている影響といったものも無視できない要因である。また、特に年少の

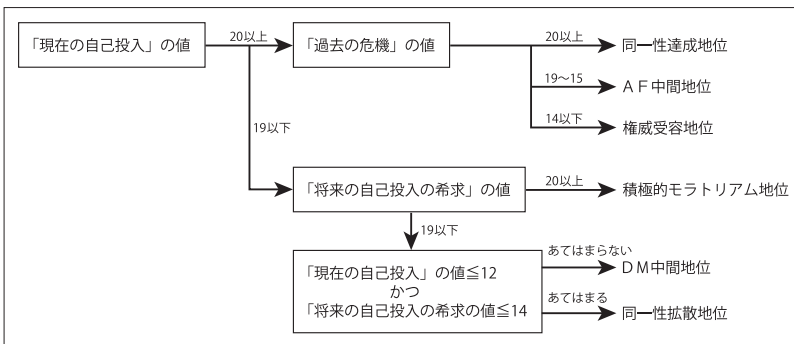


図1 アイデンティティ・ステータスの分類チャート

表 3 調査対象者の同一性地位判別尺度得点およびアイデンティティ・ステイタス

No.	同一性地位判別尺度			
	現在の自己投入	過去の危機	将来の自己投入の希求	アイデンティティ・ステイタス
A	15	20	14	DM 中間
B	12	14	15	DM 中間
C	11	18	17	DM 中間
D	17	16	15	DM 中間
E	16	16	14	DM 中間
F	21	18	22	AF 中間
G	20	19	19	AF 中間
H	11	12	15	DM 中間
I	20	17	17	AF 中間
J	22	18	15	AF 中間
Mean (SD)	16.5 (4.20)	16.8 (2.39)	16.3 (2.54)	
Standard Mean (SD)	17.2 (3.3)	17.8 (3.1)	17.5 (3.1)	

表 4 ステイタスごとの同一性地位判別尺度平均値および標準偏差

		AF 地位 (N=4)	DM 地位 (N=6)	t 値
同一性地位判別尺度	現在の自己投入	20.75 (.96)	13.67 (2.66)	5.97*
	過去の危機	18.00 (.82)	16.00 (2.82)	1.35
	将来の自己投入の希求	18.25 (2.99)	15.00 (1.10)	2.49*

* $p<.05$

きょうだいに対しては友人関係などについても心配する側面も見られた。以下に年少のきょうだいに関する語りと、年長のきょうだいに関する語りに分けて論じる。

2.1 年少のきょうだいとの関係

きょうだいの幼少時——年少のきょうだいとの接し方は両親によって決められる方針に大きく影響され、年長者としての振る舞いを身につけるように

なる。年長者としての振る舞いは、最初は両親が年少のきょうだいに対してどのように接しているかを見てそれを真似ることから始まり、年少者に対してあたかも自分と同じようなことが出来るかのように無配慮に振る舞うと両親から注意されながら、少しずつきょうだいに対する態度ときょうだいに対して取るべき役割が形成されていく。

一方で、自分が当たり前でできたようなことができないきょうだいを見ると、どうしてもできないのかと不思議に思いつつも、年少者であるがゆえに自分より能力の劣った存在としてきょうだいを捉え直すことで、きょうだいに対して養育的に接するようになり、それとともに両親の関心がきょうだいに向かうことに対して仕方ないこととして受け入れられるようになっていく。この時、親の関心を失うことに対して何かを感じていた調査対象者はおらず、当然のこのように受け入れているような語りしか見られないが、きょうだいに対しては「両親による関心や心配を向けられる自分より弱い対象」という捉え方に変化するようである。

きょうだいの小学校～大学時代——年少のきょうだいに対しては年長者として様々な影響を与えていると感じている。好きな遊びや音楽、スポーツ、進学など、年少のきょう代いは自分の姿を見て行動を真似ているように感じる。きょう代いが自分と同じような進路を選ぶときはきょう代いが自分の真似をすることに対して不快感を覚えるが、自分が同じ歳にはできたことをきょう代いができずにいるような場合には、きょうだいに対して憐みのような気遣いを覚えつつ、接し方については年長のきょうだいとしての自然なかかわりをしようとする。このことは両親や学校の教師などの接し方を見ながら、自分なりのかかわりを模索した結果、きょうだいだからこそこできるかかわりを見出すようである。しかし、このことによってきょうだい間の役割の上下関係はより固定されたものとなっていく。

その頃のきょうだいへの思いを語っているのは AF 中間地位の J と DM 中間地位の A などがいるが、両者は不登校のきょうだいを持ちつつ、きょうだいに対して感じていたことが異なっているため、比較するために以下に語りを引用する。

あんまり自分が気を遣ってもいけないんだって思いながらも、やっぱり自分がしっかりしなきゃいけないんだっていう気持ちは、やっぱりその出来事が終わった後ぐらいから、小三か小四くらいから凄く感じるようになっていて…で、そうですね、弟よりはまず自分がしっかりしようって…。<中略>弟が多少やっぱり問題を抱えてるっていうか、その小学校の最初の頃に半年くらい学校に行けなかったっていうことが多分人間関係とか勉強の面とか、体力の面とか…ってところでもちょっとハンディキャップを負う形になったっていうのを多分小四の自分がすごい感じて…。で、多分あれなんですよね、先生から、同じ小学校行ってたから、逆にこっちが気を遣われたりして…これは俺しっかりしなきゃいけないんだって…。<中略>自分がその受けた私立の高校の中学に対して、弟が受験した中学って偏差値的にも少し下のところしか受けられなかったりして、で、それに対しての弟コンプレックス感じてるんじゃないのかな？とか。逆に親もそこに深く突っ込むことをしない接し方をして…。で、多分自分の中で、弟がコンプレックスを感じてるんだろうなっていう気遣いじゃないですけども、そういう感覚になってきた。

【Jの語り】

私が例えば6歳でできたことを弟が6歳で出来ることが同じだったかっていうと、多分実際にはそうではなかったんだろうなと。やらせる機会があるないっていうだけでも大分違うと思いますけど。<中略>そうすると同じ年で出来ることは違う、まあ当たり前といえば当たり前。で、そうなって失敗だみたいな。あの子は失敗しなくてもいいけどこの子はどうだろうみたいなのはあったんじゃないかなと。だからもう環境がそうさせて、うーん、父親、母親が心配だなあと、見ているのを私も感じて、私もそれが早いのか遅いのかとか、できるのが当然かとか全くわからないんですけど、じゃあ心配ないだろうみたいな感じで、結局弟以外が全員がそういう目で見えていたかなという気がしますね。

【Aの語り】

Jは弟が自分に対してコンプレックスを持っていることを感じつつ、できないことの理由を過去の出来事のせいにしてしていることを言い訳と感じていた。Jは両親が弟に対して気を遣いつつ兄と比較する態度で接していたことを理解していた一方で、弟と自分を対等に見ていた部分があった。これに対してAは自分ができていたことが弟には出来ないことが当たり前とし、家族が弟をそういう役割に固定したと感じている。Jは弟の現状はあくまで弟の責任であって、それができないのは弟の甘えと感じているのに対して、Aは弟を家庭内で劣った存在として位置づけてしまった両親と自分の責任であると感じている。Jは両親が自分以上に弟の面倒を見るようになっていて、弟の現状を心配しているのを感じて、両親の関心を失ったことを我慢するために、次第に両親の負担にならないように振る舞おうとするようになっていく。

年少のきょうだいは自分の影響を受け続けて育っているという認識はあるが、年少のきょうだいの存在は自分に対して大きな影響を与えるものではないようだ。このような文脈でJとAは弟の存在について以下のように述べている。両者ともに弟の存在を通して自分を規定していることが表れている。

結構真逆だと思って、弟の存在が自分と。思考も違うし、それこそ自分は皆動だったけれども、弟は出席日数ギリギリでやってたとか。本当に色んなところが真逆になっているので、かなりその……自分っていうものを際立たせる意味で対比になる存在だっていう気はしますね。＜中略＞正反対なんですけど、何だろうな、逆に言うとう自分とこうかぶるところがほとんどないので、面白いんですよね。

【Jの語り】

やっぱり両親を自分の中に作って弟に接してっていうようなことをしたことで、やっぱり弟に対し、弟はなんというか、ただ家の中で完全に自分が一番年下の、まあ当然としたら当然なんですけど、それに、そこにもう完全に固定した状態をつくるということに私も加担というのは思います＜中略＞ある種自分の存在を正当化するための道具だったのかもしれないっていう気がしますね。その、そういう特に家の中でも、私とその面倒を見ている保護しているっていうような立場をとれば、まあ周りからしてみれば良いお兄ちゃんねというような評価はありますし、まあ両親に関しても、少なくとも責められることはないし、弟からも、まあなんですかね、そうさせている部分はあると思うんですけど、うーん、なんていうか、尊敬されるべきみたいなそういうような立場だったというか、私自身の安定のために必要なものだったのかなという。

【Aの語り】

Jは弟を自立した存在として語っているのに対して、Aはあくまで弟は養育の対象であり、弟がいたからこそ自分は兄を演じられたと語っている点で両者の語りは大きく異なる。しかし、両者は弟に対する接し方について両親と相談しながら家族の一員としての役割を担ったという点で共通している。弟の不登校に対しても仕方ないことと理解しようとしている部分に年長者としての振る舞いが表れている一方で、Aは不登校という行動を選択した弟に対して申し訳ないという気持ちを持ちつつ、自分には出来ない行動を選択したことにに対して、自分も弟と同じ素因を持っていることにに対して不安を感じており、きょうだいの状況と自分の現状との間に適切な距離が取れていないように思われる。

2.2 年長のきょうだいとの関係

自分の年少時——きょうだいは実際の母親よりも距離の近い母親的な存在であり、畏敬の対象であった。母親に対して要求が通っても姉が認めなければ我慢する必要があるなど、絶対的な上下関係があった。また、年が離れているきょうだいは個人として見る事が出来ないため、尊敬という感情を持つことはなかった。年が近いきょうだいに対しては一緒に遊ぶなど、ともにいる時間を長く過ごしていた。

自分の小学校～大学——自分が姉と同じ年齢になるにつれて、当時の姉の気持ちが分かるようになり、年の離れたきょうだいに対して持っていた畏敬の念は尊敬へと変わっていく。年齢の近いきょうだいに対しては一緒にいる

時間が長いことからライバル意識を持つようになる一方で、常に関心の対象であり続けるため、きょうだいの行動を真似ることが多くなる。また、きょうだいから受けた影響は長く続き、きょうだいが新しいことを始めても関心が失われることは少ない。このとき、年少のきょうだいは自分の興味や関心、価値観や行動が年長のきょうだいの影響を受けていることに自覚的ではない。このことについてIの語りを以下に引用する。

今のお姉ちゃんがやっていることをそのまま、今この音楽を聞いてたら今聞くとか、そういう感じでしたね、無意識で。それがけっこう変わったのが、中学2年生の時に、あのおばあちゃんが死んじゃって、で、そのタイミングでほんとちっちゃなことなんですけど、私はお姉ちゃんのいたテニス部からバレーボール部に変ったんですね。で、私はそこで初めて自分しかやったことのないことをやり始めたんです。それまではスイミングスクールもお姉ちゃんたちが行ってたところだし、お習字もお姉ちゃんたちが行ってたところ。で、中学も同じ所に入って、部活もお姉ちゃんがついて、ってところから、初めてなんかバレーボールをボンっとやったときに、ちょっと離れたような気がして。なんか初めて自分しかやってないことをやっているんだってことを意識しました。自分で気づいちゃったので、真似ばっかりしてるって。これは急にでも変えなきゃって。【Iの語り】

Iは自分がこれまでしてきたことがすべて姉の真似であることに中学校のとき気づいた。きっかけは祖母の死ということだが、この時どうしても姉の真似ではない自分だけのものを見つけたかったとしている。

このことと関連が深いと考えられるのが、きょうだいに対するコンプレックスの自覚である。年少のきょうだいは次第にきょうだいに対してコンプレックスを持つようになり、きょうだいから一人前の人間として認められたい気持ちが強くなる。両親に認められたいという気持ち以上にきょうだいに認められたい気持ちが強まり、きょうだいと衝突をするようになったというGの語りを引用する。

私は反抗期だったから、お姉ちゃんに対してはすごい反発してたかな。ちょっと違うような気がするけど、その憧れて目標にするというよりは、高校の時までは、何て言うのかな、お姉ちゃんに認めてもらいたいっていう気持ちの方が強かった。とりあえず自分の先を走ってるわけじゃん？で、それを凄くコンプレックスというか、馬鹿にされているように感じていて、で、それを目標に走って追い抜くことで、「あたしも結構やるでしょ？」みたいなことをお姉ちゃんに示したいというか、そういう気持ちが強かったな。まあそれは反面、憧れというか目標にしてた部分もあるんだけどさ。それが今は何かこう、あの一、一緒に暮らしてないし、まあ「認めなさいよ」ってそういう気持ちよりも、「凄いな」「いいな」っていうのが残った感じがな。【Gの語り】

きょうだいとの比較はライバル意識があるがゆえに劣等感に結びつきやすく、GもIもきょうだいと比較されないように別の世界を見つけ出して、そ

こに居場所を見出している。大学入学以降はきょうだいとの関係は客観性を持ち始めるため、少しずつきょうだいの長所や短所について理解することができ、それでいて「自分の少し先の人生を歩んでいる存在」として年長のきょうだいは位置づけられるようになる。

また、年長のきょうだいとの関係で学ぶものとして、両親との関係の持ち方が挙げられる。年長のきょうだいは親と対立しながら自己主張の仕方を自分で模索しているが、年少のきょうだいは年長のきょうだいが親に対して意見を通している様子を見て育っている。年長のきょうだいが主張を通したという前例があるため、他のきょうだいも同じように振る舞えばいいということ年長のきょうだいの両親とのかかわりを見て学ぶことができるという側面がある。年長のきょうだいと年少のきょうだいの葛藤について両方の立場から語ったというのはIしか見られないが、他の調査対象者にも通じる部分があるように思うため、以下にIの語りを引用する。

一回一番上のお姉ちゃんと、一番上と一番下のどっちが大変かっていうのを泣きながら喧嘩、あ、一回ありました。それをやったことがあります。そのときは負けたと思いましたね。もう一番上のほうが大変だと思いました。一番下の大変さはどっちかっていうとプレッシャーの部分が大きくて、まあ上がそれぞれの道を進んでた時に自分はどうするかっていう。0からどう上げてくかみたいな大変さなんですけど。一番上の大変さは0とかそういうことじゃなくて、とりあえず前に進むのに障壁がドンドンとある感じなので。【Iの語り】

Iは年少のきょうだいの苦労は上がそれぞれの道を進んだ後に自分がどのような道に進むのかということであり、積み上げるのは自分でありつつ目の前に障壁は存在しない。年長のきょうだいの苦労は積み上げるのも障壁を乗り越えるのも自分というところに年長のきょうだいの苦労があると語っている。先に述べたA、Jのきょうだいはこれらのプレッシャーに打ち克つことができていないのだが、G、Iは共に自分の望むライフコースを選択しているという点で異なっている。すなわち、自分の望むライフコースの選択に失敗すると年長のきょうだいに対するコンプレックスを解消することは困難となり、家族全体の中で自分を劣位に位置づけることに繋がる可能性がある。

3. きょうだい関係とアイデンティティ・ステータスの関連

きょうだい関係とアイデンティティの状態の関連について、調査対象者のアイデンティティ・ステータス分類の結果から検討する。AF 中間地位と

DM 中間地位の語りを比較すると、青年のアイデンティティの状態は年長であれ年少であれきょうだいのことを一人の自立した存在として認識しているかという点と関連しているように思われる。

DM 中間地位に分類された調査対象者は年少のきょうだいに対して、親のような立場で養育的にかかわる一方で、きょうだいでありながら親のような態度で接していることに疑問を持っていたり、きょうだいを自分の脅威となる存在と感じてライバル意識を持ち続けていたり、あるいはきょうだいに対して劣等感を持っていたりするなど、年少のきょうだいとの関係が年齢に応じた上下関係を持つものとして安定したものとならないのが特徴的である。これに対して AF 中間地位に分類された調査対象者はきょうだい間に年功序列が存在するのは当然のこととして、年長であれ年少であれきょうだいを一人の自立した個人として認識しているため、自分のこともきょうだいのことも過度に主観的になることなく捉えることができているように思われる。

年長のきょうだいは、父親や母親が年少のきょうだいに対して養育的にかかわるのを見て、年長者としての役割を自分の中に取り入れる。それと同時にきょうだいという親から見れば対等な関係であることに葛藤しながら、年少のきょうだいかかわっていると思われる。一方、年少のきょうだいは無意識的に年長のきょうだいと自分自身を同一視しながら、ある時点で自身の独自性について考え始め、きょうだいから受けている影響の大きさに思い悩む。きょうだいから受けている影響が単なる模倣として認識されると、年長のきょうだいに対する劣等感へと繋がっていく。年長のきょうだいに対する劣等感を解消するために、きょうだいから受けてきた影響を自分の中から排除することに執心し、時に現実場面できょうだいと衝突することできょうだいの価値観を否定し、その過程できょうだいとは異なる独自の存在として自分を屹立していく。DM 中間地位に分類された調査対象者の語りにはこの過程の中できょうだいと衝突することがほとんど見られず、きょうだいの不満や葛藤を引き受けようとする姿勢は見られない。家族の中での自分の役割というものを家族関係の中で理解しつつ、その役割に合うように過剰に自己を同一化するか、反対にその役割から逃避するといった選択をしてきたものと思われる。

総合的な考察

本研究は青年のきょうだい関係について質問紙法、面接法を併用して調査を行い、青年のこれまでのきょうだい関係とアイデンティティの関連について検討を行った。

本研究の結果から、きょうだいとの関係が青年の現在のアイデンティティの状態に影響を与えていることは推測されたものの、きょうだい個人との関係そのものが青年のアイデンティティと関連しているということではなく、青年と両親との関係を基盤とした上できょうだいとの関係が成立していると青年が認識していると推察されたことは、これまでのきょうだい研究の流れにおいて意義があると思われる。調査対象者は両親のかかわりや態度、姿勢を見ながら他のきょうだいとの間での自分の役割を試行錯誤しつつ、家族の中での自分の位置を模索していた。家族成員の中での自分の役割や立場について疑問を感じながら、家族以外との人間関係も含めて自分の担うべき役割を模索していく中で、きょうだい関係は対等のものに近づいていくと考えられる。しかし、きょうだいと自分を対等な存在であると思うためにはきょうだいに対して抱える劣等感や引け目などの負の感情を処理する必要がある、高位のアイデンティティ・ステイタスにある青年ほどきょうだいに対する負の感情を処理した上で自分をきょうだいの中、ひいては家族の中に適切に位置づけられていると思われる。これらのことから、青年のアイデンティティ形成はきょうだいとの関係だけで進行するものではなく、きょうだいを通した両親との関係において自己を定位する過程と深く関係しているのではないかと思われる。

しかし、本研究の知見は青年のこれまでのきょうだい関係と現在のアイデンティティの状態について推察するというものであり、これまでのきょうだい関係のどのような点から現在の自己定位が行われ、アイデンティティが形成されてきたのかという点について把握することはできなかった。今後は縦断研究などによってアイデンティティの様相の変化を追いつつ、それとともにきょうだい関係の認知がどのように関連しているのか検討することで、青年のアイデンティティ形成がどのように進んでいくのかという点について考察することが必要であると思われる。

参考文献

- 相川充, 2010, きょうだい構成が子どものソーシャルスキルの程度に与える影響, 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 I, 61, pp.91-pp.105
- Freeman, EM., 1993, Family Treatment Illinois: Spring-field. Charles C Thomas Publisher.
- 藤田文, 1998, 青年期の友人関係における社会的スキル——きょうだい関係との関連——, 大分県立芸術文化短期大学研究紀要, 36, pp.85-pp.94
- 繁多進・青柳肇・田島信元・矢澤圭介, 1991, 社会性の発達心理学, 福村出版
- 磯崎三喜年, 2004, きょうだい関係における葛藤の解消と自己評価維持, 国際基督教大学学報 I -A 教育研究, 46, pp.65-pp.75
- 石原敏道, 1988, 自我同一性の確立と親の養育態度の関連性について——きょうだい地位効果を中心に——, 山形大学紀要 人文科学, 11 (3), pp.23-pp.54
- 加藤厚, 1983, 大学生における同一性の諸相とその構造, 教育心理学研究, 31 (4), 292-302
- Marcia, J.E., 1980, Identity in adolescence. In J. Adelson (Ed.), Handbook of Adolescent Psychology. pp.159-pp.187. New York: John Wiley & Sons.
- 白佐俊憲(編著), 2004, きょうだい関係とその関連領域の文献集成Ⅲ, 川島書店
- 山口順子・田中理絵, 2008, きょうだいと子どもの社会的発達に関する研究, 山口大学教育学部研究論叢, 芸術・体育・教育・心理, 58, pp.193-pp.203
- 依田明, 1990, きょうだいの研究, 大日本図書

謝辞

本論文は、本学大学院人間学研究科に提出した博士論文（平成 25 年度）の一部を加筆・修正したものです。調査にご協力いただいた方々に心よりお礼申し上げます。また、論文作成にあたりご指導賜りました森岡由起子先生（本学大学院）に深く感謝申し上げます。